

## 「叙階の秘蹟」

主任司祭 晴佐久昌英

司祭・助祭になるために授けられる秘蹟を、「叙階の秘蹟」と呼ぶ。信者の中から選ばれ、司教が自らの助け手として任命するわけだが、他の秘蹟がすべてそうであるように、この秘蹟も真の授け主は神である。本人の資質や信仰が問われるのは当然であるし、誰かがそれを判断しなければならないのも当然だが、真の授け主が神である以上、秘蹟に関することはすべて神秘に属する。摂理への敬虔な信頼なしに秘蹟を扱うことは聖霊の働きへの冒瀆にほかならず、それをイエスは「許されない罪」と言った。キリスト教徒を迫害していたパウロを使徒として選んだとき、反対するアナニアに対してイエスは「あの者は私が選んだ器である」と言い切った。このパウロのおかげでキリスト教は世界宗教となり、今日の高円寺教会もある。

このたび、どちらもパウロの洗礼名をいただいた高円寺教会出身神学生、小池亮太・豊島治両名の助祭叙階式が当教会で行われた。ぼくはかつて助任司祭として当教会にいたころ青年であった二人をよく知っており、今は教区の養成担当司祭として二人の養成に関わっており、かつ、出身教会主任司祭として二人の叙階に立ち会うこととなった。今回の叙階式ほど、叙階が秘蹟であること、すなわち摂理であることを強く感じさせられたことはない。叙階の秘蹟の中心は、司教が受階者の頭に手を置く按手である。岡田大司教が二人の頭にそれぞれ手を置いたとき、天から伸びた大きな神の手が二人に触れたようにも見えた。「これは私が選んだ器である」という声が聞こえたようでもあった。

二人に言いたい。

あなた方はもはや生ける秘蹟となったのである。誰に何を言われようとも、恐れることなく口を開いてほしい。あなたがたの口はイエスの口なのだから。どんなに自信を持ってなくとも、臆することなく手を伸ばしてほしい。あなた方の手はイエスの手なのだから。その口からあふれる言葉で絶望の闇から救われ、賛美の歌を捧げる人たちの歌声が、ぼくには聞こえる。その伸ばした手に触れられて、死の淵から救われた人たちの流す感謝の涙が、確かに見える。